

「GCA 東京」報告その 2

海外学生と日本人による協働学習の新たな試み

—進化し続ける GCA 東京「課題探究研修」—

原 瑠美, 青木 俊介

はじめに

「GCA 東京」報告その 1^[1]において述べたように「課題探求型現地研修」は、もともと「グローバル・キャンパス・アジア」（以下 GCA とする）の派遣プログラムで行われていたカリキュラムである。これが受入プログラムである GCA 東京にも取り入れられたわけだが、参加する学生の日本語能力や知識レベルを考慮しながら、各回で様々な取り組みを行ってきた結果、GCA 東京独自といえる「課題探究研修」プログラムへと進化した。その大きな特徴は、日本の文化・社会に関するテーマについて、海外と学習院の学生がテーマごとに 1 つのグループとして情報収集とフィールドワークを通じて自分たちの意見を裏付け、発表するというアクティブラーニング型のカリキュラムということにある。また、課題探究研修の指導とサポートには、主に歴史学を専門とする研究者があたってきた。このように、日本語教育プログラムでありながらも、日本語教育以外の分野における専門的な研究・調査の手法が学生の探究に活かされていることも特徴の一つとなっている^[2]。

これまでの GCA 東京で「課題探求型現地研修」としていたプログラムが、現在の「課題探究研修」へと名称を変えたのは、GCA 東京 2019 冬（11 期）である。その転機となったのは、GCA 東京 2017 冬（7 期）の合宿型プログラムであり、2018 年～2019 年は、現在の GCA 東京課題探究研修の型が完成するまでの過渡期であったということができらる。

本稿では、第一筆者が GCA 東京の PD 共同研究員（以下 PD とする）として携わった 2018 夏・2019 冬・2019 夏の GCA 東京プログラム課題探究研修の内容を成果としてまとめ、その変遷と特色について紹介する。

I. GCA 東京 2018 夏（10 期）プログラム

2018 年度の GCA 東京は、PD 4 名、RA 2 名の、計 6 名で運営された。PD 4 名のうち、1 名が日本語教師としてプログラムコーディネーターを担当し、残る 3 名が課題探求研修（10 期までは「探求」と称していた）の準備指導と、受入に伴う学生対応を担当した。RA は 1 名がプログラムコーディネーターのサポートと日本語授業を担当し、1 名が事務的なサポート全般を担当した。

1. プログラム概要

GCA 東京 2018 夏は、2018 年 7 月 22 日（日）～8 月 9 日（木）の計 19 日間にわたって開催された^[3]。この回では、従来の日本語上級者（N1, N2 レベル）向けのコースに加え、初中級者（N3, N4 レベル）向けのコースを設定し、2 コース（3 クラス）を同時に開催するという新たな試みが行われた。参加者の総数は、海外学生が 46 名、学習院生が 87 名であるが、そのうち上級コースに設定された課題探求研修に参加したのは、海外学生 18 名と、学習院生 22 名の計 40 名であった^[4]。

GCA 東京 2018 夏の課題探求研修では、テーマ（グループ）として①日本のアニメ②日本のメディア③日本の食文化④日本の伝統工芸の 4 つを設定した。テーマ設定は、これまでに実施された課題探求研修のテーマを参考に、毎年特に人気のあるアニメと食文化のほか、メディアと伝統工芸を加えた。

グループを 4 つに設定した理由は、調査を進めてディスカッションする上で、10 名前後が作業及び指導にもっとも適しているからである。また、海外学生と学習院生がグループ内でほぼ同数になるように調整した。学生には、プログラム開始前に参加希望グループのアンケートをとったが、ほぼすべての学生を第一希望に割り当てることができた。

各グループのテーマ・訪問先・参加者の内訳は表 1 のとおりである。

メインの訪問先はすべて、プログラム開始までに教員が調査の上で決定し、先方と取材日のセッティングを行った。訪問先は、学生が訪問時にその場で担当者にインタビューをできるかどうかということが、もっとも大きな選定基準となっている。日本の食文化グループ以外の 3 つの訪問先には、教員が引率者として同行した。各グループの探求・報告内容を次に紹介する。

表1 GCA東京2018夏 課題探求グループ一覧

1 「日本のアニメ」グループ	
テーマ	「アニメ制作」
訪問先	杉並アニメーションミュージアム
参加者	学習院生5名 海外学生5名（中国1/韓国1/台湾2/香港1）
2 「日本のメディア」グループ	
テーマ	「新米記者のデビュー物語」
訪問先	読売新聞社 東京本社
サブ訪問先	池袋防災館（池袋消防署）
参加者	学習院生6名 海外学生3名（中国1/韓国1/香港1）
3 「日本の食文化」グループ	
テーマ	「日本の食文化」
訪問先	栄太楼
参加者	学習院生5名 海外学生6名（中国3/韓国2/台湾1）
4 「日本の伝統工芸」グループ	
テーマ	「日本の伝統工芸～十人十色～」
訪問先	富田染工芸 東京染ものがたり博物館
参加者	学習院生6名 海外学生4名（中国1/韓国1/台湾2）

2. 各グループの探求・報告内容

①「日本のアニメ」グループ

日本のアニメ制作がどのように行われるのかについて、訪問先である「杉並アニメーションミュージアム」で取材した内容をまとめ、報告した。

日本のアニメは海外で絶大な人気を誇るが、アニメグループに参加した学生も例外なく日本のアニメ愛好家であり、ディスカッションにおいても、その愛情と情熱がいかに発揮されていたと感じる。日本語の表現や、PPTのまとめは学習院生がサポートしたが、議論をリードしたのは海外学生の側であった。

報告内容は、アニメの企画制作から編集までの流れ、さらにアニメに用いられる技術について取り上げたかなり専門的なものとなった。

②「日本のメディア」グループ

新聞社にどのような部署があり、各部署の記者がどのようなスケジュールで取材を行い、執筆した記事が編集されて新聞として発行されるのかについて報告した。

メインの訪問先である「読売新聞社」の東京本社では新聞記者の擬似体験を通じて、取材の方法を学んだ[写真1]、また、災害時にメディアがどのようにして情報発信を行うのか



写真1 「日本のメディア」グループ
読売新聞社東京本社訪問の様子



写真2 「日本の食文化」グループ
和菓子作り体験の様子

を考えるため、池袋防災館にも訪問している。

大変面白かったのが、新米記者の視点から新聞社を紹介するという形で報告を行ったことである。海外学生の1人がスーツを着て新米記者を演じ、学習院生は新聞社のスタッフとなつて新米記者の疑問に答えることで、ほとんど知識のない観客も新聞社の役割や仕組みを理解することができた。進行の合間に観客も考えられるクイズを設けたり、PPTでは編集局の部屋を図面で描いたりといった見せ方の工夫も見られた。

③「日本の食文化」グループ

和菓子の紹介に加え、最近の若者の和菓子離れの問題とその理由について研究した結果を報告した。

訪問先の「栄太楼」は、GCA東京で何度も取材に協力いただいている阿佐ヶ谷の和菓子店であり、訪問時には和菓子作りを体験できることもあって、毎回人気である [写真2]。

学生は、なぜ若者の和菓子離れが進んだのか、考えられる理由について栄太楼の主人にインタビューで尋ね、さらに自分たちでもアンケート調査を行った。そして、和菓子より洋菓子の人気が高いという調査結果を踏まえ、若者に和菓子を楽しんでもらうにはどうすればいいのか、和洋折衷の工夫や、体験教室の開催、若い人にも好まれる和菓子作りの取り組みについて提案・紹介した。

④「日本の伝統工芸」グループ

「東京染め小紋」について取り上げて報告を行った。

訪問先は、神田川沿いにある「東京染ものがたり博物館（富田染工芸）」で、学習院大学からも歩いて行ける場所にある。東京染め小紋については、海外学生だけでなく、学習院生も初めて知ったという学生がほとんどであった。取材日の当日、グループメンバーは染め小紋の職人による工房の案内と染体験を受けたあと、職人へのインタビューを行った。事前に

準備していた質問に加え、さらにその場で質問を投げかけることもでき、大変有意義な時間となった。

報告では、染め小紋の歴史と特徴に加え、この伝統工芸が未来に引き継がれていくにはどうすればいいのか、現在行われている取り組みや、メンバーによる提案を述べた。まとめの最後に、体験で染めた小紋の生地をメンバー全員で大きく広げ、報告会場では歓声が上がった。

3. 小結

毎年「過去最高気温」が報告される東京の猛暑であるが、2018 夏も大変に暑く、その中でキャンパスの外に出かけてフィールドワークを行うことは、学生にとってかなりの負担があった。課題探求研修では、教員が設定したメインの訪問先のほか、調査状況に応じて学生がサブの訪問先を追加できるが、夏は活動場所を広げることが気候的に難しく、ほとんどのグループがメインの訪問先のみでの調査に留まったことは致し方ないといえる。加えて、プログラム期間中に台風が二度直撃し、GCA 東京学生部^[5]企画による大交流会と、プログラム最終日の報告会の日程・時間を調整する必要があるがあった。そのような状況ではあったが、学生たちは限られた時間の中で自分たちのテーマについて調査を進め、その成果を報告会で発表することができた。

2017 冬プログラム以降、課題探求研修は、教員が設定したテーマに基づいてグループで事前調査を行い、何をインタビューするかを前もって決定してからメインの訪問先を訪れ、そこで経験、インタビューした内容をまとめ、報告するという形になった。

2018 夏もその形式で実施され、また報告内容のまとめは、必ず未来に視点を向け、自分たちがこの調査で得た知識を今後どうしていくべきか、どうすればテーマの抱える問題を改善できるか、今後につながる結論を導き出すように指導した。結果として、学生の報告は「こんなことがわかって勉強になった」「おもしろかった」といった感想で終わるのではなく、明確なテーマと目的に基づいて調査と分析を行い、それによって明らかになった結果を発表するものとなった。

このような調査報告は、GCA 東京設立当初のような、参加者が興味のあるテーマを自由に探し求め、各自で調べて報告する「探求」とはすでに異なっており、その齟齬については教員も認識するところであった。そして改めてカリキュラムの内容とラベルを再検討し、これまでの「課題探求研修」から「課題探究研修」へと名称を変更することを決定した。こうして新たに「課題探究研修」としてスタートを切ったのが、GCA 東京 2019 冬プログラムである。

II. GCA 東京 2019 冬（11 期）プログラム

1. プログラム概要

2017・2018 の冬のプログラムは合宿型で実施したが、プログラムの開催時期やカリキュラムの異なる 2 つのコースで構成されていることなどを考慮し、2019 冬は、夏に引き続き学習院大学のキャンパス内を中心に行われることとなった。

2019 冬のプログラムは、2019 年 2 月 12 日（火）から 3 月 1 日（金）の 18 日間にわたって開催された。2018 年夏に引き続き、日本語初中級者コースと上級者コースが同時に開催され、参加者の総数は、海外学生が 23 名、学習院生は 29 名となった。夏に比べて参加者数が減少したのは、派遣元の大学の休暇時期と GCA 東京の開催時期が適合しなかったためである。このうち課題探究研修に参加した上級コースの海外学生は 12 名、学習院生は 12 名であった^[6]。

2019 冬の課題探究研修は、メインテーマを「豊島区をよりよくする」とし、主なフィールドを学習院大学の所在地である豊島区に設定した。2017 冬は千葉県長生郡一宮町、2018 冬は千葉県富津市金谷において、町おこしを目的とした地域密着型のフィールドワークを行ったが、2019 冬もその型に倣ったものである。

小テーマは、①「豊島区の芸術文化対策」②「豊島区の人口問題」③「豊島区における多民族共生」の 3 つで、いずれも豊島区が取り組んでいる課題である。学生たちは、小テーマごとにグループに分かれ、調査・取材を行って知り得た情報をもとに、「豊島区をよりよくす

表 2 GCA 東京 2019 冬 課題探究グループ一覧

1 「豊島区の芸術文化政策」	
メイン訪問先	東アジア文化都市 2019 豊島実行委員会・横浜市文化観光局
参加者	学習院生 3 名 海外学生 5 名（中国 3/韓国 2）
2 「豊島区の人口問題」	
メイン訪問先	株式会社ユウト
サブ訪問先	シーナと一平, KAKURURU
参加者	学習院生 3 名 海外学生 3 名（中国 1/韓国 2）
3 「豊島区における多民族共生」	
メイン訪問先	豊島区政策経営部企画課
他インタビュー	シリア出身：ハナさん／ネパール出身：スミタさん
参加者	学習院生 6 名 海外学生 4 名（中国 3/韓国 1）

る」ための提言を行うことを目指した。表2はそのグループの一覧である。

どの課題についても、海外学生や学習院生の予備知識が乏しいため、まずはテーマそのものについて調査することが必要となった。プログラム開始の2ヶ月前から、学習院生は3回の事前研修に参加して下調べを行い、海外学生とはLMS“manaba global”の掲示板を使って情報共有した。海外学生も、学習院生の情報をもとに自分たちの国の状況や問題を比較事例として投稿し、情報の確認や意見交換を行った。

プログラム開始後は、各グループが実際にフィールドワークを行い、直接見聞きした情報をもとにさらなる調査を進め、その結果を報告にまとめた。

2. 各グループの探究・報告内容

①「豊島区の芸術文化政策」グループ

豊島区が日本・中国・韓国の文化交流プロジェクト「東アジア文化都市」の2019年開催都市であることから、「東アジア文化都市」について提言を行うことを目指した。

メインの訪問先は、プロジェクトを運営する「東アジア文化都市2019豊島実行委員会事務局」に決定し[写真3]、さらに過去の事例と比較検証するために「東アジア文化都市2014」の開催担当部署であった「横浜市文化観光局」にも訪問した。また「東アジア文化都市」がどのように告知されているのか実際に豊島区内を歩いて調査をした。

報告では、まず豊島区で「東アジア文化都市」を主催するに至った背景を述べ、次にイベントのPRが十分に行き届いていない点に着目した。そして問題の解決方法として「テーマ立て」によるイベントコンセプトの明快な発信と、「映え映え作戦」と名づけたインスタグラム等を用いた人を惹きつけるアピール方法を提案した。



写真3 「芸術文化政策」グループ
豊島区役所訪問の様子

②「豊島区の人口問題」グループ

まず豊島区がどのような人口問題を抱えているのか、そしてその問題解決のためにどのような対策を打ち出しているのかを調査した。その中でもとくに近年増加傾向にある空き家問題と、豊島区に多く居住している外国人留学生の問題を組み合わせ、人口問題解決のための提言を行うこととした。

解決の糸口として、空き家リノベーションに着目し、豊島区内で実際にリノベーションを行っている「株式会社ユウト」と[写真4]、「シーナと一平」をメインの訪問先とした。どちらも空き家をリノベーションしたシェアハウスを運営しており、インタビューによって空き家を活用することの有用性と問題点が明らかになった。またリノベーションカフェである「KAKURURU」にも学生たちでアポイントを取って訪問し、その際にサンシャイン周辺の住宅街をフィールド調査した。

その上でグループが提案したのが「GCAハウス」である。空き家リノベーションによる海外学生と学習院生によるシェアハウスを作って国際交流の場とし、大学と海外学生、そして地域の連携を高めて人の循環を生み出すことで、豊島区全体の活性化と魅力向上に繋がり、行く行くは人口減少を食い止めることに繋がるのではないかと報告した。

③「豊島区における多民族共生」グループ

豊島区の留学生や外国人労働者を含めた外国人住民が近年更なる増加傾向にあることに着目し、それらの外国人住民に対して、言語面・生活面・日本人との交流におけるサポートがどのように行われているのかを調査した。

まずはチャイナタウンと呼ばれる池袋の北口を訪れ、中国人だけではなく、他の様々な国籍の人が日本で暮らすために必要な食料品店やサービスがあるのを見て、豊島区における「共生」の様子を確認した。続いて、実際に豊島区に住んでいる外国人2名にインタビュー



写真4 「人口問題」グループ
株式会社ユウト訪問の様子

を行い、在住にあたってこれまでどのようなことが問題になったかを調査した。行政側の対策については豊島区役所を訪問し、外国人に対してどのようなサポートを行っているのか、取り組みについて質問を行った。

その結果、行政によるサポート情報が、必要とする外国人住民にあまり届いていないという問題を取り上げ、解決方法として、インターネットの活用を提案した。例として、豊島区のFree Wi-Fiに接続したときに豊島区役所のホームページが出るような仕組みの構築、外国人が目につく場所に案内パンフレットを置くなど、さらなる情報の発信力を高めることで、暮らしの支援や住民間の交流の活性化を図れるのではないかと結論した。

3. 小結

2019冬の課題探究研修は、これまでに実施されたプログラムの中でも大変に高度なものとなったが、学生たちは限られた時間の中で十分にカリキュラムをこなし、成果を発表することができた。報告をまとめる段階ではほぼ休憩も取らずに意見交換を熱心に行い、時間の許す限界まで報告内容を練り上げようとする様子が見られた。

今回の課題探究は豊島区への提言を最終目的としたため、報告会には豊島区役所の方々や、インタビューに協力いただいた方々にも出席いただいた。このことが、報告者となる学生にとって、テーマについてより探究を深め、問題の本質を見極めた上で見解を打ち出すことへの良い意味で大きなプレッシャーとなったといえる。報告会後の送別会では感極まって泣き崩れる学生が何人もいたが、それだけ彼らがこの課題探究研修に全力で打ち込み、確かな結果と達成感を得られたからだろう。

加えて、2019冬プログラムでは、豊島区におけるさまざまな繋がりを持つことができたのも一つの成果となった。「芸術文化政策」グループが調べた「東アジア文化都市」との関連で、海外学生たちの書いた書道作品が豊島芸術書展で展示された。また、「人口問題」グループが取材した株式会社ユウトでは、毎年フランスのグランゼコールより留学生を受け入れており、今回の取材をきっかけとして、その留学生の交流イベントの企画や、日本語授業のサポートに学習院生が参加した。さらに「多民族共生」グループは、国際センターの別プログラム「わくわくとしま日本語教室」で学ぶ外国人住民の方と交流する機会となった。このような地域との連携を活かすことで、地域に還元するという面でも、課題探究研修の一層の充実と発展を目指していけるはずである。2019冬は、今後の可能性に繋がる大きな足がかりとなったプログラムであった。

III. GCA 東京 2019 夏（12 期）プログラム

1. プログラム概要

2019 夏は、2019 年 7 月 21 日（日）から 8 月 8 日（木）までの 18 日間にわたって実施された。今回は日本語上級者（JLPT N2 以上）のみを対象に募集し、海外学生は 26 名、学習院生は 49 名が参加した。学習院生の参加者のうち、海外学生との課題探究研修に参加したのは 39 名（10 名は日本語研修のサポーターとしてのみ参加）である。

2019 夏は、メインテーマを「日本の食」とし、グループごとの小テーマは、①和菓子②洋食③給食④食器・調理器具⑤弁当⑥アンテナショップの計 6 つを設定した。グループ一覧を表 3 にまとめた。

2. 各グループの探究・報告内容

①「和菓子」グループ

日本の和菓子と四季の関係について探究を行った [写真 5]。

メインの訪問先は、2018 夏と同じく阿佐ヶ谷の和菓子店「栄太楼」を訪ね、またサブの訪問先として「とらやミュージアム」にも足を運んだ。

報告では、和菓子の歴史と主な種類について分類し、和菓子作り体験とインタビューから、日本の和菓子には四季が反映されていること、季節を表現するために、見た目を飾るだけでなく、材料にもその季節のものを使用すること、その作成には確かな経験と技術が必要であることをまとめた。さらに、代表的な季節の和菓子を季節ごとに紹介した。

②「洋食」グループ

「洋食」とはなんなのだろうかという疑問をもとに、洋食というジャンルが誕生した歴史



写真 5 「和菓子」グループ
ディスカッションの様子

表3 GCA東京2019夏 課題探究グループ一覧
【メインテーマ：「日本の食」】

1 「和菓子」グループ	
テーマ	「わくわく和菓子」
メイン訪問先	栄太楼
サブ訪問先	とらやミュージアム
参加者	学習院生7名 海外学生6名（韓国4/台湾2）
2 「洋食」グループ	
テーマ	「洋食チーム」
メイン訪問先	一般社団法人日本洋食協会
サブ訪問先	煉瓦亭（銀座）
参加者	学習院生6名 海外学生3名（韓国3）
3 「給食」グループ	
テーマ	「給食の多様性とこれから」
メイン訪問先	学校給食歴史館（埼玉県学校給食会）
サブ訪問先	café OGU1
その他	府中市立給食センター ※ FAXによる質問回答
参加者	学習院生7名 海外学生4名（中国1/韓国2/台湾1）
4 「食器・調理器具」グループ	
テーマ	「便利調理グッズ」
メイン訪問先	株式会社サンクラフト
他インタビュー	一般社団法人日本キャラベニスト協会
参加者	学習院生6名 海外学生4名（中国1/韓国2/台湾1）
5 「弁当」グループ	
テーマ	「BENTO！ 日本のお弁当について」
メイン訪問先	一般社団法人日本キャラベニスト協会 米食文化研究所
参加者	学習院生7名 海外学生5名（中国2/韓国1/台湾2）
6 「アンテナショップ」グループ	
テーマ	「アンテナショップと食文化」
メイン訪問先	北海道どさんこプラザ有楽町店／IBARAKI sense
サブ訪問先	北海道どさんこプラザ池袋店／宮城ふるさとプラザ
参加者	学習院生6名 海外学生4名（中国1/韓国1/台湾2）

背景や、洋食の定義について調査し、洋食が日本料理の一部であることを明らかにした。

「日本洋食協会」にインタビューを行ったほか、銀座の「煉瓦亭」で実際に洋食を食べるという体験に基づき、報告では代表的な洋食であるハヤシライス・トンカツ・コロッケを取

り上げて、なぜ洋食に分類されるのかという点について、調理法や材料から根拠を紹介した。また、「米食に合わせて改良した西洋料理」という洋食の定義を紹介し、このことから、例えばアンパンなどは洋食には分類できないことを述べた。

③「給食」グループ

訪問先での調査や海外学生の国との比較から、日本の給食が学校で生徒に食事を提供するだけでなく、教育の一環とされているという点で、大きな特徴を持つことを明らかにした。

埼玉「学校給食歴史館」の展示とインタビューから、学校給食誕生から現代に至るまでの歴史と変遷、また海外と比較して日本の給食のメリットと魅力はなんなのかということを経験でまとめた。

さらに、現在の給食の問題点についても着目した。グローバル化が進んだことで増えた様々な宗教的背景を持つ子供やアレルギーを抱える子供へどのような対応をしているのかについて、「府中市立給食センター」にも質問を送り、弁当の持参の呼びかけ、アレルギー児童専用の調理室を設置することなどで対応していることを調べた。その上で、学校側から1年に1回のアレルギー検査を義務付けると良いのではという提案をした。

④「食器・調理器具」グループ

日本で普及している「便利調理グッズ」の調査を行った。「日本で便利調理グッズが発達したことには、日本の食文化の変化が関連しているのではないか」という仮説を立て、その根拠として共働き世帯の増加・単独世帯の増加・キャラ弁など料理を綺麗に盛り付ける文化を挙げた。

実態を調査するために、便利調理グッズを制作している「株式会社サンクラフト」を訪れ [写真 6]、インタビューを行った結果、共働き世帯の増加・単独世帯の増加という社会的変化が、日本の食文化に変化をもたらし、便利調理グッズが発達したことがわかり、仮説を裏付けることができた。

このほか、調理グッズは主婦の需要に応じて発達したという仮説を立てていたが、主婦ではない単身赴任の会社員などの要望で作られたものが多いこと、むしろ主婦のニーズに合わせた商品は少ないということが、「キャラベニスト協会」の沼畑恵美子氏のインタビューなどからもわかり、今後主婦目線の商品開発がさらに進んでほしいと報告をまとめた。

⑤「弁当」グループ

まず弁当文化に着目し、日本社会では当たり前の弁当が海外にもあるのかという疑問について、特に中国・韓国・台湾人を対象としたアンケートを行った。その結果、中国では冷たい米を食べる習慣がないが、韓国や台湾では、日本ほど発展していないものの、弁当を買って食べる事が判明した。



写真6 「食器・調理器具」グループ
株式会社サンクラフト訪問の様子

そして日本の弁当文化が海外に比べてとくに発達した理由について、「PRENUS 米食文化研究所」を訪問してインタビュー調査を行い、日本の文化的背景と食材という2つの特徴を取り上げた。

その上で、日本の特徴的な弁当文化である「キャラ弁」について、「日本キャラベニスト協会」の協力で実際に作ってみることで、キャラ弁の魅力や工夫について理解した内容を報告でまとめた。

⑥「アンテナショップ」グループ

アンテナショップが日本独特の文化であることに注目し、なぜ日本ではこれほど多くのアンテナショップがあり、東京など人が多く集まる都市にあるのか、アンテナショップの役割について調査を行った。そして調査に先立っては、「その地域の食べ物が、その地域の知名度を上げるのに役立つ」という仮説を立てた。

仮説を裏付けるにあたり、まずアンテナショップがどのようなものかを知るため、池袋にある「宮城ふるさとプラザ」と「北海道どさんこプラザ池袋店」を訪問し、さらに茨城アンテナショップの「IBARAKI sense」と「北海道どさんこプラザ有楽町店」でインタビュー調査を行った。

調査によって、茨城がメロン生産量全国No.1であることなど、その地域について知らないことが多いことに気づき、アンテナショップは、「その地域の食べ物が、その地域の知名度を上げるのに役立つ」のではなく、むしろ逆であり、「その地域の食べ物の知名度が、地域の知名度を高めている」という結論に至った。

3. 小結

課題探究研修は、テーマ設定も重要となるが、2019夏は「日本の食」をテーマにしたこ

とが、海外学生も学習院生も、ともに関心を抱いて課題に取り組める結果に繋がった要因の一つだったように思う。食は、国民性・地域性が顕著であるため、異文化コミュニケーションを図る上でも話題に取り上げやすい。報告会でも、海外学生の出身国・出身地域の習慣や経験がこれまで以上に取り入れられ、報告会に出席したギャラリーからも驚きや納得の反応が多く見られた。

また、先に述べたように、どのグループの報告も客観的な資料や情報に基づいた説得力のあるものであった。このことは、報告に対する参加者自身の自信にも繋がる。調査だけでなく、報告方法にもグループごとの工夫や個性が見られ、観客のレスポンスを期待した問いかけや、クイズなどを組み込んだ、全体的にメリハリがあって内容の濃い、大変生き生きした報告会であり、今後も学びの多いプログラムに繋げていきたいと感じさせる課題探究研修となった。

IV. おわりに

以上、2018 夏、2019 冬、2019 夏の課題探究研修をまとめた。2018 夏プログラムまでの「課題探求研修」が、2019 冬以降「課題探究研修」となり、2019 夏に至って、日本語能力の向上や文化体験だけでなく、外国人と日本人の協働による「課題発見・解決力」の育成に繋がるプログラムへと進化してきたことがわかる。

課題探究の授業においては、結果を発表にまとめるにあたり、起・承・転・結を意識するよう指導した。それを具体的な研修内容に沿って分類すると、

起：何について発表するのか

承：発表の意義・背景

転：インタビュー・現地調査によって得た情報

結：調査によってわかったこと

となる。

このうち、とりわけ重視したのが「承」の部分であった。これによって、自分たちはなぜこのテーマについて発表するのか、調査によって何を明らかにしなければならないのかが明らかとなり、仮説を立てて調査を進めることができるようになる。そして「転」は、「承」で立てた仮説を検証・解決する手段として位置づけが明確となり、目的をもってインタビューや現地調査を行うことに繋がるのである。

このように、主観によらず客観的な資料や情報に基づくようにした結果、2019 夏はどのグループも着実に説得力のある報告となった。「課題発見・解決力」育成の成果といえる。

課題探究研修のカリキュラムにおける、日本語プログラムとの連携についてもここで取り上げておきたい。GCA 東京上級コースのプログラムは、午前日本語授業、午後課題探究研修が充てられてきたが、日本語授業には課題探究を補完する役割もある。

とりわけ重要なのが、インタビュー調査に向けたトレーニングとして行われる「専門家インタビュー」である。これは、学習院内の各分野の専門家にグループでインタビューを行い、その結果を発表するものであり、インタビューの作法や、注意すべき点、聞き出した情報のまとめ方などを事前に学習する。

このほか、報告会に向けてのプレゼンの練習や、新聞記事調のフォーマルな文章の書き方なども学習する。日本語研修の一環ではあるが、学習院生もこれに加わり、海外学生だけでなく双方の学びとなっている。

最後に、2020年度のGCA 東京について触れる。

2020年度は世界的な新型コロナウイルス流行拡大の影響を受け、GCA 東京 2020 夏を中止することとなった。しかし、対面式のプログラムは断念したものの、オンラインによるプログラムという初の試みを行うことになった。10月3日から12月19日までの毎週土曜日、全12回構成で、テーマは「アニメ・漫画にみる日本の文化・社会」とし、アニメ・漫画を使ってリサーチやプレゼンテーションの方法を学ぶことを目的とする、課題探究に特化した研修プログラムである。

アニメ・漫画をテーマに据えたのは、これまでGCA 東京に参加した海外学生にも多くの日本のアニメ・漫画ファンが見受けられ、日本語を学ぶ上で一つの原動力・機会となっているという実感があったからである。実際、募集を開始したところ、海外学生・学習院生計40名程度の募集に対して、倍以上の応募を集めることとなった。また、応募者の国籍がこれまで以上にバラエティーに富んでいるのは、遠方からでも参加がしやすいオンライン形式の効果であろう。この状況を受けて、面接と選考フォームを行って選抜を行うこととなり、結果、海外学生41名、学習院生18名、計59名の参加が決定した。本報告執筆現在もプログラムが進行中である。このプログラムの取り組みと成果については、別の機会に報告したい。

GCA 東京は2021年度の単位化が決定しており、今後は学習院生の学びという点がさらに重視されることとなる。同時に、これまでと変わらず、外国人学生の日本語教育・日本文化体験の場であり続けることも必要である。GCA 東京の理念である、海外学生と学習院生がともに一つの課題に取り組み学習する「共学」「協働」というテーマと、これまでに培ってきたカリキュラムが、引き続き学習院大学の国際化に貢献するものと信じる。

注

- [1] 幸松英恵（2021）「『GCA 東京』報告その1：異分野の研究・教育者間の協働による日本語・日本文化研修の取り組み—プロジェクトワーク型の課題探求型現地研修を中心に—」『学習院大学国際センター研究年報』第7号。
- [2] 課題探究研修の目的と試みについては、青木俊介・幸松英恵（2021）「『課題発見・解決力』の養成を軸とする新たな短期日本語研修プログラムの試み—学習院大学グローバル・キャンパス・アジア東京「課題探究研修」をモデルとして—」『学習院大学国際センター研究年報』第7号で論じられているので、そちらを参照されたい。
- [3] プログラムスケジュールのうち、初日はチェックイン日、最終日はチェックアウト日に当てられている。プログラム期間中、海外学生はフレックスステイン江古田に滞在する。チェックイン日は学生部（現国際交流学生企画部）による、海外学生の出迎えと江古田ツアー（江古田周辺の買い物、食事場所の案内）が企画される。
- [4] 初級（N4 レベル）の海外学生は13名、中級（N3 レベル）の海外学生は15名であった。初中級の学生たちは、上級の課題探求に相当するものとして、フィールドトリップ研修を行った。フィールドトリップは、グループごとに東京の一日ツアーコースをテーマに基づいて計画し、実際にツアーに出かけた内容を1枚のポスターにまとめるという研修である。最終日の報告会では、会場に全グループのポスターを掲示し、海外学生たちがポスターセッションの形式で、フィールドトリップの思い出や感想を発表し、ギャラリーからの質問に答える。
- [5] 前掲注1 参照。
- [6] 初中級2クラスは11名の参加となり、フィールドトリップは3グループに分かれて行った。

（はら るみ・あおき しゅんすけ 学習院大学国際センター PD 共同研究員）